

古代文学研究の今後について

森 朝 男

古代文学会の例会五百回記念シンポジウムは、まる一日を掛けて、第一部に「歌の生成と生態」、第二部に「歴史叙述と注釈」の二テーマを置き、そして第三部に総括討議を置くという、分厚いものであった。この第一、二部の設定はまことによく考えられたもので、企画者の炯眼を思わせる。私はこのところずっと学会の活動に及び腰になっているので理解が十分ではないと思うが、この十年ほど、古代文学会の研究の流れは、歌や歴史叙述や宗教的言説の立ち現れる場のドラマに、焦点を合わすものになってきていたと思う。それを踏まえ、その成果を集約的に明らかにして、その上に立って今後の研究を展望しようという意図が、この企画には見えた。近年の研究をこの二部にまとめたのがおもしろいと、まず思えた。企画者の労に敬意を表したい。

第一部は、歌がどのように生成するか、またそれは声の文学としてどのような生態を持つか、といった問題を、第二部は、歴史叙述とその注釈がどのようにして新しい思考・言説を生成させてゆくか、という問題を考察している。学会外から酒井正子氏（第一部）、阿部泰郎氏（第二部）という、それぞれのテーマに最適のパネリストの参加を得、貴重な発言をいただいて

有益であった。学会内からは第一部に岡部隆志、猪股ときわ（司会）の二氏、第二部に津田博幸、斎藤英喜（司会）の二氏が加わった。多岐に渡る話で私は理解するのに追われ、第三部のパネリストとして提言を展望の方へ敷衍することができず、何やらかはずれな質問をするかっこうになってしまった。第一、二部のパネリストの方々、ことに学会外から参加して下さった二氏には、申しわけなく、お詫びしたい。

いま再び当日の資料を読み返し、いろいろ考えてみている。まず第一部の方では、酒井氏が与那国の葬儀における、「クイカギ」という、歌の萌芽状態ともいうべき死者への呼びかけや、納棺前頃に頻りにそれとともに歌われる「みらぬ歌」の野良仕事歌（ディラバ）や叙情歌スンカニ（シヨンガネ）との間のジャンルの関係などについて提言された。葬歌という特殊な分野の、しかももう減じようとする寸前の資料が提供された。死者を相手に声をかける、呼びかける、それが歌になっていく感じなのに驚かされた。

続いて岡部氏は雲南省白族の歌垣の實際を報告、掛合いは歌によっていかに非日常世界を作るかで、その成否に寄って掛合いは続いたり途切れたりする、歌うことを楽しむ目的で来る

人もいれば結婚相手を捜しに来る人もいるなど、興味深い実態の指摘がなされていた。

これに対して第二部の方では、阿部氏は聖徳太子伝を材料に中世における歴史叙述の転成や新たな生成の様相を、津田氏は平安初期の日本紀講における神学といってもよいものの生成や増幅の様相を、それぞれ詳細に具体的に提示された。私などには日頃馴染みの少ない、あるいは初めて見る史料類が提供されていた。こういうものを、いままさに新しい関心から掘り起こす研究が出てきている。勿論何年も前から両氏らの研究に触れていて知っていることだが、感銘をあらたにした。

結果的に第一部と第二部とは非常に明瞭な対比的関係を持つことになった。第一部のうたの問題では、村落的な共同体の言語の様相が、第二部では国家または特定の思想性を具えた史家や宗教者の表現の様相があらわにされたのである。それはかなり本質的な差異に繋がっていて、前者には口頭性が、後者には書記性が顕著である。生成の前提に存在するものも、村落の成員に共有される伝承と文書としての史書や伝記とであって、後者はそれらを読み解き、読み替える、十分に「知」といってもいいものの営みであった。

この後者の「知」の営み手は宗教者であったり、史家であったりするが、標準的な意味での文学的表現者（物語の作者や歌人）などのように相渡るものを持っているか、あるいはそこに生成するあらたなテキストなどの質が、どのように同時代の標準的な意味での文学表現の史的レベルを説明しうるか、という点に私は感心をおぼえる。その点の研究や論理構成がもっと積

極的になされるべきであろう。中世文学はどんなジャンルも著しい宗教性・思想性・歴史意識を内包しており、またそれらの強まりが既成の文学ジャンルを解体させ、新たなジャンルを生成させていくともしているから、この視覚からの研究が文学研究になるうる可能性の高さを持っている。古代ではどうだろう。平安時代では。平安初期、九世紀のもっと幅広い言語的情况との繋がりのなかで、多分これらはある意味を持ち、また持たされているのであろう。そこをもっと知りたい気がする。

なぜそういうこたわり方をするかといえば、つまり、時代を遡ればそういうものと文学との区分はつけない（例えば古事記も日本書紀も歴史記述であり、文学であり、宗教書であるといったぐあいに）が、逆に下れば分化してくる。そのときその分化過程のドラマこそ、古代文学（史）研究の最も大きな課題ではないかと思われるからだ。そしてそういう有機的関連性のなかで、この問題の意味が明瞭になったとき、これは見事な文学研究になるといえる。

第一部でとりあげられた共同体の歌の問題は、古代文学会の研究史のなかでは、かつて発生論、様式論、さらには表現論という形で、和歌研究その他へ繋がられ、文学論となることでできていたと思う。しかし、なおこちらについても、これから、である面が大いにあると思う。ことに中国少数民族の歌垣のフールドは、失われた日本列島および南西諸島の歌垣文化の欠落を補うものとして、古代文学研究にどう繋がられていくのか、真におもしろくなるのはこれからだろう。それを見ていた。でもなかなか困難な問題がありそうだ。フールドの諸事

象のなかから、古代的要素や日本列島との共通要素を、そうではないものと選り分けることが必要と思うが、それはどのようにしたらできるのだろうか。

フイールド研究も史料研究も、あくまで古代文学研究の〈中央〉であって欲しい。周辺研究であつたり、基礎研究であつたりにとどまって欲しくない。しかしもうとくに明らかになつてゐることだが、民俗学的古代文学研究も歴史社会学的古代文学研究も、従来のやり方にとどまってなどいられないところへ来てしまった。どう〈中央〉でありうるかは、その材料なり、独自の方法の確立にかかつてゐるというほかはない。

古代文学史は文芸意識に基づく文学的表現態を分化し、いわゆる古典を確立して終るとみるのがよい。その場合、和歌に例をとれば、やはり万葉集の後期が終りでなく、平安前中期ぐらいまでを見込んだ方がいい。古代和歌はそこまで行つて完成すると考へるのだ。歌語というものができたり、歌に対する批評というものができて、表現が美的様式を確立し、古典が形成される。そこまで考へた方がよくはないか、と思うのである。

またそういう和歌の動きとも並行して、かな（和文）の散文態文学も始発する。日本文学史は上代・中古という分け方に典型的に示されるように、この過程を連続としてよりも飛躍として認識する度合が強かつたと思へる。和歌は、万葉から古今へ、というのがその過程を簡明にいい表したことになると思うが、それは想像されるほどに切れてはいないで、強い繋がりや継承関係を内包している。しかしそうとはいつてもまたけつして平坦な道ではなく、たいそう大きなドラマチックな動きを含

んでもゐる。そうしたことに目を向けるとき、八世紀の研究を受け継いで、次に九世紀の研究が、古代（上代）文学の側から構想されなければならないというふうに思えてくる。

私はことに、表現における美の成立というものを考へる必要があると思う。表現における美についてはいろいろな切り口があると思う。抽象的な言語の美学もありうるかもしれない。それとも必要と思うが、具体的に考へることがいっそう重要だ。古代宮廷及び貴族社会の問題は文学論としては、究極的にここへ行きつくべきことではなかつたか、と考へられる。それがやはり最も具体的な切り口になるのではないか。

終りにまたシンポジウムのことに帰るが、史家や宗教者の知的な営為が、文学の問題としての作家論と等しいか、重なるか、という問題である。つまり宗教者を対象に据へることが、文学研究としての作家論に方法を提供することになるか否か、ということだ。いまひとつ、私にはそこが分らない。かりに近現代社会を想定しても、両者の間には重なりあいがありつつ、やはり小さくない隔たりがありそうだ。その隔たりに何が存在するのだろうか。美かも知れない。表現の美を構築する条件としての〈虚〉とか〈嘘〉とかいうものかもしれない。先に「分化」といった文学史的命題は、こうしたものの胚胎と深い関わりを持つてゐるであらう。